

## 編集後記

平成三年（一九九一）に早稲田大学総合学術情報センターが開館してより、早いものでもうまる二年を経過した。幸いにして大過なく、新中央図書館は三年目に入ろうとしている。有り難いことである。

しかし「大過なく」というのは図書館員の側から見た言葉で、実際の資料を日々利用する研究者や学生から見れば、まだまだ資料面でも、運用面でも不備・不都合が多いであろう。それら利用者の要望に、どのように応えてゆくかが、われわれの最も留意せねばならない点である。

新館開館後、われわれは大小さまざまな問題に直面してきた。その一端は、前号の特集にも出ているが、利用者にとって本当に使いやすい図書館になっているかどうかを、つねに利用者の立場に立って検証し、運営に反映させる努力が必要であろう。

利用者の要望といつてもさまざまななかには真つ向から対立するような内容のものも少なくない。「館内でワープロを使わせろ」というのもその一つである。

日本語ワードプロセッサの普及は今や言うも愚かなことで、当紀要の原稿もワープロ原稿がほとんどである。印刷業界ではかつての活版印刷にかわって電算写植がほ

とんどであり、原稿をフロッピーのまま入稿することも日常的に行われている。作家でも村上春樹氏などはワープロ原稿だそうで、かつてのように原稿用紙に万年筆で、無数の推敲のあとをとどめた原稿は、しだいに過去のものとなりつつあるのかも知れない。

そのように文房具としてのワープロが定着している昨今、図書館においてワープロの使用を規制するのは、アナクロニズムととられるかも知れない。しかし一方では、図書館は静謐な読書環境を保つべき義務がある。もし、ワープロや電卓の使用を認めたとしたら、満員電車の中のウォークマンと同様、「音がうるさい」という苦情が寄せられるのは目に見えている。

したがって現在、当館では、僅かな限られた座席をワープロ・電卓などの使用を認める専用席として設定しているほかは、それらの使用を認めていない。これに限らず、運用上判断に窮するような事例は枚挙に遑がない。

図書館の存立要件は図書（資料）、利用者、そして館員である。図書館はよい資料を数多く網羅的に揃え、それらを用いることができる使いやすくして、研究・教育の利便に資することをもってその本務とする。館員は資料と利用者を結びつけるコーディネー

ターとしての役割を担わなければならない、その限りにおいて、かなり高度な専門性が要求されよう。

新館準備期間以来、図書館内では何度か図書館員の専門性に関する論議がかわされてきた。それは研修や人材育成の問題ともつながり、また人事配置の問題ともからむため、ともすれば出口のない論議に陥る弊もあつたが、ともあれ多くの有為な若い館員の専門性を高める場として、当紀要を、ますます充実させねばならないと考える今日この頃である。

大学図書館の紀要雑誌としては遙かな先達にあたる天理図書館報「ピリア」が近々百号を迎えるという。もとより「ピリア」には及ぶべくもないが、わが紀要も鈍足ながら着実な歩みを積み重ねてゆきたいものである。（記・松下）

早稲田大学図書館紀要 第38号

一九九三年五月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 高橋芳樹

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

〇三（三）〇三（四）一四一